稲田大二郎の旧車ジャーナリズム

決して色褪せない感動と興奮

伝説のハコスカGT-Rと対峙する

Rocky Auto × SKYLINE GT-R [KPGC10]

1960年代後半から1970年代初頭という
日本のモータリゼーションにおける激動期を生き抜いた名車達。
果たして、さまざまな時代を経てきた今でもその魅力は感じ取ることができるのだろうか。
そんな想いを確かめるため、モータージャーナリスト稲田大二郎が
珠玉の1台との出会いを求めて旅に出る。

レポート：稲田大二郎／写真：水川尚由

ハコスカGT-Rには何台も乗った経験がある。

でも、ほとんどがレース用だったり、チューニングしてあって、実はノーマルというかオリジナルには初めて乗るのだ。

このウン千万円という高価なGT-Rでは、とくにドアを開けるのも気を使う。

GT-Rならではの低いバケットシートに潜りこむと、新車並のなんともいえない香りがしてイイ気分だ。ツインカムS20エンジンは一発始動！ ロッキーオートの在庫車は旧車と言えどもすべていつでも走れる状態という言葉に偽りはない。

ウオン、ウオンというソレックス40φキャブの吸気音は相変わらず人間の感性に心地よく響き渡る。

長めのストローク量を持つシフトを1速に入れて走り出す。6500、7000r.p.mまで淀みなく、綺麗に回る。

意外と低中速トルクがあって乗りやすい。チューニングカーはもっとピーキーだったような気がする。「そうか、うん。これがノーマルだ」と妙に納得する。

重いステアリング、ボディの軽い縦れ具合、両フェンダー前端にあるミラー、室内のダッシュボードやインパネにしてもノーマルだから決して今風の派手さやカッコ良さはないけど、これがオリジナルの良さなのだ。

気分よく田舎道を流していると45年以上前、オレが学生の頃に目の前で見た、ハコスカGT-R

のデビューレースを思い出す。GT-Rそのものは4枚ドア(PGC10)で1969年に登場。レースでは1位でゴールしたトヨタ1600GTのベナルティで優勝を拾うというものだった。翌年の2ドア、このKPGC10から破竹の連勝を記録していくわけだ。

皆さんもご存知のとおり、GT-Rというのは国産スポーツカーの伝説。現代のR35GT-Rまで連綿と続く王者の血統なのだ。ここまでくると、もはや凄いとしか言いようがないだろう。

がらにもなくそんなノスタルジーに浸りつつ、そんなことを思いながら走るのはとても気持ちイイものだ。

ロッキーオートの渡辺社長とオレ。
いつ会ってもクルマの話ばかりになっちゃうね。

冷静に考えると今やGT-Rといっても、ノーマルでは決して速いわけではない。スピードとか走行性能では最新のコンパクトカーにも及ばないかもしれない。それでも、「こんなクルマはほかにはない、できることなら側に置いておきたい」と思わせてくれる魅力がある。

それがいたってフツーの小型セダンスカイラインをベースにしながら、レーシングカーニッサンR380のGR8エンジンをデチューンしたS20を搭載した"羊の皮を被った狼"。これほど色濃くレーシングマシンの匂いを漂わせるクルマは当時のGTカー全盛時代でも希有な存在だったものだ。

ところで、この個体は実に程度が良い。

エンジンルームは無理にピカピカに磨き上げているわけじゃないが、キチンと手入れされてきた証拠にボディの軋みなんか全くない。まさに新車時から温存されてきたような佇まいだ。

ただし、完璧にオリジナルと違う箇所はタイヤ。現代のハイグリップラジアル、アドバンネオバを履いているからその分ステアリングは重く、路面のうねりにもとられてしまうのは少々残念。だけど、これくらいはカッコいいから許してあげよう。

オレは基本的に旧車でもシッカリと手を入れてパワフルにブッ飛ばしたい性格だけど、ハコスカGT-Rとトヨタ2000GTという2台だけは特別。ノーマルの味わいも格別だと思わせてくれる。

しかし、希少なクルマだけに、その価格はもはやそう簡単には手が届かないものとなってしまった。これまで富にはとんと関心のなかったオレだけど、この2台に触れる時だけは「おカネが欲しいな」と思う。

——平成28年11月　稲田大二郎

レトロスポーツの定番ワタナベ8スポークホイールに組み込まれていたのはアドバンネオバ。正直、ここまでハイグリップな必要はなく、もっとプアなタイヤのほうがマッチする

-Car Specification-
スカイラインGT-R　2HT
初年度登録：昭和47年1月
カラー：シルバー
価格：1980万円(2016年11月現在)
ロッキーオート販売車両

元来、GT-Rというクルマはサーキットこそが生きる場所だった。しかし、登場からまもなく半世紀を迎えようという今、こういった静寂の中に佇む姿も実に味わい深い

取材協力：ロッキーオート
〒444-0003 愛知県岡崎市小美町字殿街道153
☎0564-66-5488(商談は完全予約制)
http://rockyauto.co.jp/

むりやり磨き込まれていないのが、逆に良い雰囲気を醸し出しているエンジンルーム。セル1発で目覚めるグッドコンディションを保っている

稲田大二郎の
旧車ジャーナリズム

現代の水準で考えると決して速いわけじゃないが、豪快なキャブの吸気音とスポーツマフラーからのエキゾーストノートは若かりし日の興奮を蘇らせてくれる。実に良い体験をさせてもらって幸せだ

心地よいサウンドと身体に伝わる振動
サーキットで見た、あの日の興奮が蘇る。

内外装ともに当時の雰囲気を上手に保っている。必要に応じてメンテナンスをされ、大切にされてきた個体なのだろう。こういった上質なクルマもどんどん少なくなってきていると聞く。手に入れることができる方は幸せだ

長めのシフトストロークを持つ5速ミッションだが、ギヤ入りなどにまったく問題なし。丁寧に扱われてきたことがよくわかる

サンエイムック 旧車のすべて vol.8 2017年1月13日発行

G-ワークス保存版 旧車に乗りたい人に贈るユーザー目線のガイドブック

SAN-EI MOOK

旧車のすべて

G-works G-ワークス 特別編集

今買える'70～'80に乗る!

Vol.8 オリジナル旧車の乗り方編

オリジナル旧車実走インプレ

ガレージ実例で見る旧車の保管方法

ディーラーがおこなう旧車再生法

プロのレストア&徹底メンテナンス

稲田大二郎 旧車ジャーナリズム

特集 スカイライン&GT-R

フェアレディZの電装を現代風にアレンジ